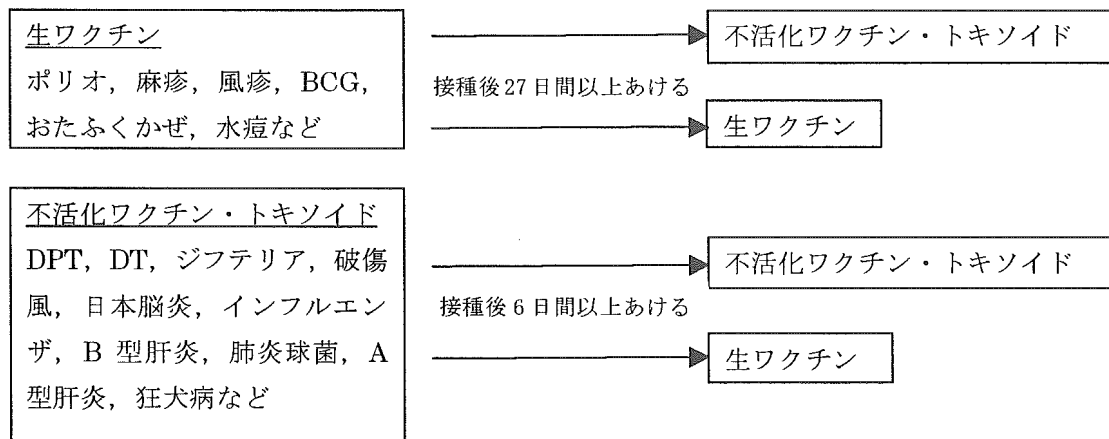


別の種類のワクチンを受ける場合の予防接種の接種間隔



(4) 参考

Q: 「明らかな発熱を呈している者」の考え方を教えてください。

A: 発熱は種々の疾患の前駆症状である場合があるため、このような場合にはワクチン接種を中止する必要があります。明らかな発熱とは、通常 37.5℃（腋窩温又はこれに相当するもの）以上をさします。検温は接種を行う医療機関で測定し、接種時の健康状態を把握することが必要です。

Q: 種々の感染症罹患後は、どのくらいあけて接種すればよいのでしょうか。

A: ウイルス感染症の発病直後にワクチンを接種することは通常ありませんが、治癒後も体調が平常に戻るのにかかる日数等には個人差があるので、接種の時期については個別対応が原則です。以下の様な目安が予防接種ガイドラインに示されているので、ご参照下さい。「麻疹、風疹、水痘及びおたふくかぜ等に罹患した場合には、全身状態の改善を待って接種する。標準的には、個体の免疫状態の回復を考え、麻疹に関しては治癒後 4 週間程度、その他（風疹、水痘及びおたふくかぜ等）の疾患については治癒後 2-4 週間程度の間隔をあけて接種する。その他のウイルス性疾患（突発性発疹、手足口病、伝染性紅斑など）に関しては、治癒後 1-2 週間の間隔をあけて接種する。しかし、いずれの場合も一般状態を主治医が判断し、対象疾病に対する予防接種のその時点での重要性を考慮し決定する。また、これらの疾患の患者と接触し、潜伏期間内にあることが明らかな場合には、患児の状況を考慮して接種を決める。」

- Q：現在地域で風疹が流行中しています。本人またはその家族が感染している可能性もありますが、接種してもよいですか。
- A：家族等に発病者や潜伏期間中の者がいても、本人が接種不適合者に該当していなければ接種しても差し支えありませんが、当日の本人の健康状態を十分に把握した上で実施してください。風疹患者の感染性は、発疹の発症する2～3日前から発疹が出た後の5日間くらいまでであると言われています。本人がすでに風疹ウイルスに感染して潜伏期間内であれば、ワクチンの効果が現れる前に発病する可能性があります。
- Q：罹患歴のある人や予防接種歴のある人への接種は、どうしたらよいですか。
- A：罹患歴や予防接種歴のある風疹抗体陽性者に、風疹ワクチンを接種しても特に問題はなく、抗体価が低い場合は抗体価を高めることとなります（ブースター効果）。本人または保護者の希望があれば、接種前に抗体検査を実施してもよいと思われませんが、抗体陽性者への接種は副反応の出現頻度なども含め特に問題はありません。なお、風疹は多くの場合、臨床診断のみでは他の発疹性疾患との鑑別が困難で、確定診断には検査診断が必要です。そのため、ウイルス学的或いは血清学的診断の結果がない限り「風疹に罹患したという記憶」を信じることは危険と言えます。同様に「予防接種歴がある」とは、接種の記憶ではなく接種の証明又は記録があるものに限るべきです。
- Q：アレルギー体質、アトピー性皮膚炎、喘息の方への接種は可能ですか。
- A：すべてのアレルギーが一律に接種不可能というわけではありません。アレルギー体質、アトピー性皮膚炎、喘息があるだけの場合は、通常接種が可能です。アレルギー症状の程度に配慮した上で、皮内反応を実施し可否の判断を行ってから慎重に接種するという方法もあります。但し、接種液の成分によってアナフィラキシーを呈したことが明らかな者は接種不適合者で、アレルギーを呈するおそれのある者は接種要注意者です。成分については各製剤の添付文書を参照し、確認してください。また、必要に応じて、アレルギーや予防接種の専門医などに紹介してもよいでしょう。
- Q：6か月以内に輸血歴あるいはガンマグロブリンの投与を受けている者への接種は、どうすればよいですか。
- A：ガンマグロブリンには高単位の麻疹抗体が含まれていますが、風疹の抗体についても同様に含まれている可能性があり、投与を受けた人は一時的に血液中に風疹抗体を保有する可能性があります。このような状態の時に風疹ワクチンを接種すると、血液中の風疹抗体によって風疹ワクチンウイルスが中和されてしまい、十分な免疫ができない可能性が生じます。輸血についても同様の事が言えます。ワクチン添付文書には「輸血及びガンマグロブリン製剤投与との関係」について、「本

剤を輸血及びガンマグロブリン製剤の投与を受けた者に接種した場合、輸血及びガンマグロブリン製剤中に風しん抗体が含まれると、ワクチンウイルスが中和されて増殖の抑制が起こり、本剤の効果が得られないおそれがある。接種前 3 か月以内に輸血又はガンマグロブリン製剤の投与を受けた者は、3 か月以上すぎるまで本剤の接種を延期すること。また、ガンマグロブリン製剤の大量療法、すなわち川崎病、特発性血小板減少性紫斑病（ITP）の治療において 200mg/kg 以上投与を受けた者は、6 か月以上すぎるまで接種を延期することが望ましい。本剤接種後 14 日以内にガンマグロブリン製剤を投与した場合は、投与後 3 か月以上経過した後に本剤を再接種することが望ましい。」と記載されています。

Q：風疹予防接種の必要性を判断するために、念のため HI 抗体検査を行いました。抗体価がいくつの場合に接種が必要ですか。

A：HI 価が 8 未満、8、16 の場合には接種することをお勧めします。

Q：妊娠中毒症の方の分娩後の風疹ワクチン接種は、いつ行えばよいですか。

A：妊娠中毒症が十分回復した後に行うべきです。本人の体調や、紛れ込み事故の可能性を少なくすることを優先してください。また、慢性腎不全に陥っている場合には、その主治医ともよく相談して下さい。

◆ 4 接種の実際

(1) 接種液の調整

溶解は直射日光の当たらない場所で、必ず接種直前に行います。

まず、ワクチンに添付の「蒸留水」を「0.7ml」注射器にひき（添付の蒸留水は0.7ml以上入っています。）、それを凍結乾燥してある風疹ワクチンのビンにゆっくり注入します。溶解後、このうち「0.5ml」を取ります。接種量は小児も成人も同じ0.5mlです。異常な混濁、着色、沈殿及び異物の混入その他の異常がないかを調べて下さい。風疹ワクチンのラベルは各社ともピンク色に統一されていて、誤接種の防止になります

溶解後の安定性は経時的に失われていきますので、溶解後すみやかに接種してください。

(2) 接種部位

上腕外側（伸側）の下 1/3 の部位、あるいは三角筋外側部に接種（皮下注射）するのが無難と考えます。この部位に接種するのは、橈骨神経の損傷を防ぐことを第一に考えなければならぬからです。

(3) 使用済み注射器、ワクチン瓶、溶解液瓶の廃棄

風疹ワクチンは生ワクチンなので感染性がありますが、ウイルスは紫外線に弱く速やかに不活化され、ワクチンにより感染が起きる可能性は極めて低いと考えられます。念のため「感染性廃棄物」として処理すべきか、通常の「医療廃棄物」として処理するかは規定されていませんが、「感染性廃棄物」として処理することを勧めます。

(4) 記録

予診票に、接種日、ロット番号（外箱に貼付されたシールで代用可）、接種量（0.5ml）、医療機関名（実施場所）、医師名を記入します。予診票は、カルテに綴じ込むなどして必ず保管して下さい。

また、接種を受けた者には、接種証明（特に用紙の規定はない）の発行、母子手帳の産後早期の経過欄（母子手帳後半にある子供への接種欄には記載しない）への記載などにより、上記同様の内容で接種の記録を残します。

◆ 5 接種後の注意

(1) 接種直後の観察

接種後はその場でしばらく（30分程度）接種を受けた者の様子を見る必要があります。これは、非常にまれですが、アナフィラキシーなど重篤かつ緊急対応が必要な副反応は、接種後30分以内に生ずることが多いという理由からです。30分間その場で経過をみられない場合には、何かあればすぐに医師に連絡をとるか、診察を受けるよう必ず指示して帰宅させます。

(2) 接種当日の入浴及び運動について

入浴は差し支えありません。これは生活環境の整備によって、入浴時に注射部位又は全身性の感染を受ける可能性は極めて低くなっており、即時型アレルギーが予想される注射後1時間を経過すれば、入浴はさしつかえないと考えられるためです。

また、過激な運動や深酒は、それ自体で体調の変化を来すおそれがあるので、ワクチン接種後24時間及びワクチンによる副反応が出現した時は治癒するまで避けることが必要です。

(3) 副反応発生時の連絡の指示

副反応や異常な反応がまれに起こることを説明しておきます。接種後に、高熱、からだの異常、異常な反応が現れた場合には、すみやかに医師の診察を受けるように知らせておくことが大切です。

(4) 避妊

接種後、少なくとも2ヶ月間の避妊が必要なことを再度説明します。

しかし、万が一、ワクチン接種した後に妊娠が分かった場合でも、世界的にみてもこれまでにワクチンによる先天性風疹症候群の発生報告はなく、その可能性は否定されているわけではありませんが、人工中絶等を考慮する必要はないと考えられます。

(5) 参考

Q：接種を受けた人から、風疹感受性者（風疹の免疫を持たない者）に感染することはありませんか。

A：風疹ワクチン接種後3週間以内に被接種者の咽頭から一過性にワクチンウイルスの排泄が認められますが、このウイルスによる周囲への感染は起こりません。したがって、風疹ワクチン接種前の子どもや、妊娠初期の妊婦と接触しても問題はありません。

Q：風疹抗体が陰性だったので、分娩後に風疹ワクチンを接種しました。授乳してもか

まいませんか。

A：米国における報告によると、風疹ワクチンウイルスは乳汁中に排泄され、母乳で保育される乳児に一時的に抗体産生が認められると報告されています。しかし、乳児は無症状であり、抗体産生も低く、かつ一時的であってこのような形で乳児に風疹の免疫を与えるには至らなかったとされています。分娩後早期に授乳婦がワクチン接種を受けても、そのために乳児に風疹感染が起こるような可能性は極めて低いと考えられます。

(妊娠中等の検査で、HI 価が 16 以下であった場合には、次の妊娠に備えて 1 か月健診時等の出産後早期に風疹ワクチン接種を受けることが勧められます。米国では風疹感受性者に対しては出産後の入院中の接種が勧められています。)

Q：風疹ワクチン接種後の抗体獲得状況の有無を確認するとしたら、どのような検査方法で、いつ行えばよいですか。

A：HI 価を、接種後 6 週以上あけて測定するとよいでしょう。検査方法については IgG 抗体(EIA)でも効果判定が可能ですが、どの位の値であれば感染防御可能かが不明なため、HI 価が適当と考えます。測定時期については、接種後 4 週で陽性率 100%の報告がありますが、急ぐ必要のない限り 6 週以降が確実にしょう。2 週、3 週では早すぎます。

◆ 6 副反応（健康被害）とその対応

(1) 風疹ワクチンの副反応

風疹ワクチンは、副反応の非常に少ないワクチンといえます。

副反応としては、まれに発疹、じんましん、紅斑、掻痒、発熱、リンパ節腫脹、関節痛などを認めることがあります。〔定期接種について実施された 14 年度予防接種後健康状況調査（全国 5,331 人を対象とし、一定の健康状況の変化に関する接種後 4 週間の観察。ワクチンの副反応とはいえない健康上の変化も含まれている。）によれば、風疹ワクチンは主として 1～3 歳児が受けており、接種後に観察された発熱は 11.9%（うち、38.5℃以上は 7.3%）、局所反応は 1.4%（接種 3 日目以内に集中）、発疹は 2.6%（約半数が 0～7 日に発生）、リンパ節腫脹は 0.4%、関節痛は 0.3%であった。〕成人女性に接種した場合、小児に比して関節痛を訴える頻度が高いといわれています。

重篤な副反応として、まれにショック、アナフィラキシー様症状の報告がありますが、ワクチンからゼラチンが除去されてから、報告数は激減しています。また、まれに急性血小板減少性紫斑病が報告されています。〔定期接種後の血小板減少性紫斑病の報告件数は、平成 14 年度 2 件（接種者数 1,245,227 人）、平成 13 年度 2 件（接種者数 1,533,866 人）、平成 12 年度 4 件（接種者数 1,723,735 人）、平成 11 年度 6 件（接種者数 2,028,508 人）となっています。〕

(2) 健康被害

ワクチン接種後、一定期間に種々の身体的反応や疾病がみられることがあります。接種後に異常反応を疑う症状が見られた場合、これを健康被害と呼んでいます。健康被害の起る要因としては、予防接種そのものによる副反応の場合の他、偶発的に発症又は発見された疾病が混入することもあります（「紛れ込み事故」と称しています）。ただし、実際には、原因を明らかにすることは困難な場合が多くあります。

副反応を起こさないためには接種前に既存疾患を発見しておくことが重要です。このため接種前の体温測定、予診や予診票による健康状態のチェックが行われています。しかし、ワクチンの改良が進んだ今日でも、また予診を十分に行っても、予防接種による予知できない重篤な副反応はまれに起こりうるので、副反応とその対策に関する知識を持つことが必要です。

(3) 通常みられる副反応発生時の対応

ア 発熱

接種後の発熱が、ワクチンの副反応によるものかどうかの判断は非常に難しいと言えます。小児の接種（定期接種について実施された調査）での発熱率は 11.9%ですが、感染症をはじめとする他の原因であることも多いと考えられます。必要に応じて、発熱の一般的

処置として冷却、アセトアミノフェン等の解熱剤を投与しますが、他の原因による発熱も考え、通常発熱時と同様の姿勢で経過を慎重に観察することが重要です。

イ 発疹、頸部リンパ節腫脹、関節痛など

これらの症状は通常特に治療なしで自然に改善します。なお、これらの症状がワクチンウイルスによるものであれば、風疹の通常の潜伏期間（2～3週間）の後にみられると考えられます。

ウ 局所の反応

発赤、腫脹は通常特に治療なしで3～4日で自然に消失しますが、発赤、熱感の強い時には局所の冷湿布を行います。

(4) 重篤な副反応発生時の対応と報告

ショック、アナフィラキシー様症状などに対する処置は一般の救急治療に準じて行うので、救急医療セットなど必要な備品の準備が必要です。紫斑や皮下出血等がみられた場合には、風疹ワクチンによる急性血小板減少性紫斑病の可能性も考慮して診療します。

報告ついてですが、任意接種では、薬事法に基づき、一般の医薬品の場合と同様に必要に応じて「医薬品安全性情報報告書」を厚生労働省医薬安全局に提出することが義務づけられています。「医薬品・医療用具等安全性情報報告制度」実施要領によれば、報告対象となる情報として、①死亡、②障害、③死亡又は障害につながるおそれのある症例、④治療のために病院又は診療所への入院又は入院期間の延長が必要とされる症例…等があげられていますので、実際的には、「入院を要するような重篤な副反応」が対象になると考えられます。報告書用紙は自治体及び保健所に常備されているほか、独立法人医療機器総合機構のホームページ (<http://www.pmda.go.jp>) から入手できます。(定期接種の場合には、報告基準に従い所定の様式により市町村長へ報告が必要です。詳しくは予防接種ガイドラインを参照してください。)

(5) 健康被害の救済措置（任意接種の場合）

(予防接種法に基づく定期接種の場合の対応については予防接種ガイドラインを参照してください。)

予防接種法に基づく定期接種以外の予防接種で生じた健康被害については民法でその賠償責任を追及することは難しく、多大な労力と時間を費やさなければなりません。被害者の迅速な救済を目的として、独立法人 医薬品医療機器総合機構法（平成14年法律第192号）に基づく公的制度（医薬品副作用被害救済制度、生物由来製品感染等被害救済制度）が設けられており、当該者（健康被害者）が請求（申請）します。

医薬品副作用被害救済制度は、医薬品（病院・診療所で投薬されたもの他、薬局で購入した者も含む）を適正に使用したにもかかわらず一定の健康被害が生じた場合に対して、医療費、医療手当、障害年金等の救済給付を行うものです。また、生物由来感染等被害救済制度は、生物製品を適正に使用したにもかかわらず、その製品が原因で感染症にかかり、健康被害が生じた場合に対して同様の給付を行うものです。なお、いずれの制度において

も、入院が必要な程度の疾病や傷害が対象となります。該当者を診断した場合には、これらの救済制度のことを知らせ、申請が行われる場合には診断書の作成が必要になります。問い合わせ先は下記のとおりです。

独立行政法人 医薬品医療機器総合機構 健康被害救済部副作用給付係
〒100-0013 東京都千代田区霞が関 3-3-2 新霞ヶ関ビル 10 階
電話：03-3506-9411 URL：<http://www.pmda.go.jp>

風疹ワクチンの接種を希望される方へ
 ー 定期接種対象年齢（生後12～90か月未満）以上の方（任意接種）用 ー
 国立感染症研究所 感染症情報センター

1. 風疹とは

風疹は患者さんの飛沫（ひまつ）を介して感染するウイルス感染症で、発疹（ほっしん）、発熱、リンパ節のはれを特徴とします。潜伏期（感染してから発病するまでの日数）は2～3週間です。目が赤くなるといった症状がみられることもあります。

通常、子供では3日程度で治る病気ですが、稀（まれ）に、血小板減少性紫斑病（3,000人に1人）、脳炎（6,000人に1人）といった重い合併症（がっぺいしょう）がみられることがあります。

2. 大人が風疹にかかった場合の特徴

関節痛がひどいことも特徴とされています。1週間以上仕事を休まなければならない場合もあります。

3. 妊娠初期に風疹にかかった場合の症状

妊娠初期の女性が風疹にかかると、お腹の赤ちゃんに風疹ウイルスが感染して、先天性風疹症候群の赤ちゃんが生まれる場合があります。感染経路はお子様やご主人、一緒に生活しているご家族からうつることが多いため、ご家族が風疹にかからないよう、ワクチンをうけておくことも大切です。先天性風疹症候群という病気は、生まれつきの心臓病、白内障（はくないしょう）、難聴（なんちょう）といった心臓、目、耳などに色々な組み合わせで障害をもつことがある病気です。

4. 日本における風疹の流行状況

最近、風疹患者さんの数が減ってきていましたが、平成15年頃から日本の各地で局地的な流行がおこっています。これまでの調査から、風疹の流行は初春から初夏にかけて多く、数年くらい続くことが特徴といわれています。毎年1名の報告であった先天性風疹症候群の赤ちゃんも平成16年は10名報告されています。

これらのことから、定期接種の期間を過ぎてしまった方においても、風疹にかかったことがない、風疹ワクチンをうけたことがない方は、妊婦さんを守る、重い合併症をふせぐといった意味で、男性も女性も風疹ワクチンを受けておくことが強くすすめられています。

1. 接種を受けることができない人

1) 妊娠をしている女性および妊娠している可能性がある女性はワクチンを受けることができません。ワクチン接種後は少なくとも2か月間の避妊が必要です。万が一、ワクチンを接種した後に妊娠がわかった場合は、かかりつけの産婦人科の先生にご相談下さい。なお、これまで世界的に見ても、ワクチンによる先天性風疹症候群の患者さんの報告はありませんが、その可能性が否定されているわけではないので、接種前の注意が必要です。

2) ワクチンを受ける3か月以内にガンマグロブリン（血液製剤の一種で、重症の感染症の治療などに使われます）の注射あるいは輸血をうけたことがある人は、免疫が十分にできませんので、接種を受けることを延期する必要があります。また、大量のガンマグロブリンの注射をうけたことがある人は、6か月程度延期する必要があります。

3) 生ワクチン（麻疹、風疹、BCG、ポリオ、水ぼうそう、おたふくかぜ、黄熱ワクチンなど）の後は27日以上、不活化ワクチン（インフルエンザ、三種混合（百日咳・ジフテリア・破傷風）、二種混合（ジフテリア・破傷風）、日本脳炎、A型肝炎、B型肝炎、狂犬病、肺炎球菌ワクチンなど）の後は6日以上接種間隔をあける必要があります。

風疹ワクチンに限ったものではありませんが、

4) 接種直前の体温が37.5℃以上であった人

5) 重い急性の病気にかかっている人

6) 風疹ワクチンに含まれる成分（接種医におたずねください）でアナフィラキシーという

重いアレルギー反応を起こしたことがある人

7) 接種医が接種しない方が良いと判断した場合には、接種をうけることができません。

2. 接種を受けるときに注意が必要な人（接種にあたっては、かかりつけの先生と相談する必要があります）

- 1) 先天性異常、心臓、腎臓、肝臓、血液、脳神経、発育発達の病気、悪性腫瘍など何らかの病気がある人
- 2) これまでの予防接種で2日以内に発熱がみられた人、またはアレルギーを疑う症状（全身の発疹やじんましんなど）がみられた人
- 3) これまでにけいれんを起こしたことがある人
- 4) これまでに免疫機能に異常（感染症によくかかったり、感染症が重くなったりすることがあります）があると言われたことがある人
- 5) 風疹ワクチンに含まれる成分（接種医におたずねください）でアレルギーを起こすおそれのある人
- 6) 薬や食べ物でアレルギーを疑う症状（全身の発疹やじんましんなど）がみられた人
- 7) 接種当日の体調が普段とちがう人
- 8) 家族や周りで最近1か月以内に麻疹、風疹、水ぼうそう、おたふくかぜにかかったことがある人がいる場合
- 9) 最近1か月以内に何か病気にかかったことがある人

3. 風疹ワクチンの効果

風疹ワクチンを接種することによって95%以上の人が免疫を獲得しますので、ワクチンを接種してからであれば、風疹の患者さんと接触してもほとんどの場合発症を予防することができます。しかし、いつまで免疫が持続するかについては、獲得した免疫の状況や、その後の周りでの流行の程度によって異なります。

4. 風疹ワクチンの副反応

接種後の副反応は非常に少ないワクチンとあってよいでしょう。風疹ワクチンに限ったことではなくワクチン全般で言われることですが、稀に接種後30分以内にアナフィラキシーという重いアレルギー反応を認める方がいますので、接種を受けた後は少なくとも30分間、接種を受けた医療機関などで様子を観察しましょう。

子供を対象にしたこれまでの調査では、接種後5～14日に発熱（37.5℃以上38.4℃未満が1.9%、38.5℃以上が2.6%）、発疹（1.3%）、リンパ節のはれ（0.6%）が報告されています。しかし、通常数日の経過で自然によくなります。

成人女性にワクチンを接種した場合、子供にくらべると、関節痛の頻度が高いと言われていますが、この場合も数日から1週間程度で自然に治ります。

風疹にかかった場合には3,000人に1人の割合でみられる血小板減少性紫斑病ですが、ワクチン接種後にも稀（100万人に1人程度）ではありますが、認められる場合があります。

接種後2～3週間は副反応の出現に注意をしましょう。

5. その他注意すること

ワクチンを接種した人の咽頭（のど）から接種1～2週間後にワクチンウイルスがでてくることはありますが、周りの人にうつることはありませんので、妊婦さんの家族の方が接種を受けられても心配はありません。むしろ、妊婦さんの家族で風疹の免疫（めんえき）をもっていない方は、昨年からの流行を考えると、早めに受けておかれた方が良いでしょう。

予診票はこれまでの様子を知るための重要な情報ですので、正しく記入しましょう。

接種した当日は入浴は可能ですが、接種部位を清潔に保ち、はげしい運動をひかえ、体調をよく観察しましょう。もし、何か気になる症状がみられた場合は接種医に相談しましょう。

風疹予防接種申込書・予診票（任意接種用）（例）

（この予診票は国立感染症研究所感染症情報センターが案として作成したものであり、実際に使用する場合は接種する医療機関毎に作成して下さい。）

この予診票は予防接種の証明となりますので、医療機関で大切に保管してください。

受信日	平成	年	月	日	診察前の体温	度	分
住所						Tel	()
受ける人の氏名				男	生年月日	昭和・平成	年 月 日生
保護者の氏名				女	年齢	歳	か月

質問事項（必要な所に○をつけ、内容を記入してください。）太字にチェックがある場合は、接種にあたって医師と相談して下さい。

質問事項	回答欄		医師記入欄
1. 接種を受けられる方が女性の場合 1) 今妊娠しているあるいは妊娠している可能性がありますか 2) 接種後2か月間の避妊について説明をうけましたか	はい いいえ	いいえ はい	
2. 風疹の予防接種について説明文を読みましたか	いいえ	はい	
3. 風疹ワクチンの効果や副反応について理解しましたか	いいえ	はい	
4. 最近4週間以内に何か予防接種をうけましたか	うけた (ワクチン名)	うけていない	
5. 最近6か月以内に輸血あるいはガンマグロブリンの注射をうけましたか	うけた (いつ) (理由)	うけていない	
6. 今までに予防接種、薬、食品でアナフィラキシーという重いアレルギー反応をおこしたことがありますか	ある (原因)	ない	
7. 今までに予防接種、薬、食品で発疹、じんましんが出たり、体の具合が悪くなったことがありますか	ある (原因)	ない	
8. 今日ふだんと違って具合の悪いところがありますか	ある (内容)	ない	
9. 今、何か病気にかかっていますか	はい (病名)	いいえ	
10. 今、何か治療（投薬）をうけていますか	はい (治療内容、薬名)	いいえ	
11. 最近1か月以内に病気にかかったことがありますか	ある (病名)	ない	
12. 今までに特別な病気（先天性異常、心臓、腎臓、肝臓、血液、脳神経、免疫不全症、悪性腫瘍、その他の病気）として医師の診断を受けたことがありますか。	ある (いつ) (病名)	ない	
13. 9, 10, 11, 12の場合、かかりつけ医に今日の予防接種をうけても良いと言われましたか	いいえ	はい	
14. 最近1か月以内に家族あるいは周りに麻疹、風疹、水ぼうそう、おたふくかぜなどにかかった人がいますか	いる (誰) (病名)	いない	
15. ひきつけ（けいれん）をおこしたことがありますか ひきつけ（けいれん）をおこした時、熱はでましたか	ある (年齢 歳) (回数 回) でなかった	ない でた (°C)	
16. 家族の中に予防接種で具合が悪くなった人はいますか	いる (誰) (ワクチン名)	いない	
17. 家族の中に先天性免疫不全と診断されている方はいますか	いる (誰)	いない	
18. 今日の予防接種について、何か質問がありますか	ある (内容)	ない	

医師の記入欄

以上の問診及び診察の結果、今日の予防接種は（可能・見合わせる）いずれかに○をつけてください。

医師のサイン

予診の結果を聞いて、今日の予防接種を受けますか（はい・見合わせます）いずれかに○をつけてください。

保護者（成人の方は本人）のサイン

使用ワクチン名	接種量	実施場所・医師名・接種日時
ワクチン名	(皮下接種) 0.5ml	実施場所
Lot No.	(接種部位)	医師名
最終有効年月日 平成 年 月 日	(左・右) 上腕伸側部	接種年月日 平成 年 月 日 時 分

風疹 Q&A

風疹（ふうしん）と先天性風疹症候群について

● 風疹とはどんな病気ですか？

答え：風疹ウイルスによっておこる急性の発疹性感染症で、流行は春先から初夏にかけて多くみられます。潜伏期間は2－3週間（平均16－18日）で、主な症状として発疹、発熱、リンパ節の腫れが認められます。ウイルスに感染しても明らかな症状がでることがないまま免疫ができてしまう（不顕性感染）人が15－30％程度いるようです。一度かかると、大部分の人は生涯風疹にかかることはありません。集団生活にはいる1－9歳ころ（1－4歳児と小学校の低学年）に多く発生をみています。風疹ウイルスは患者さんの飛まつ（唾液のしぶき）などによってほかの人にうつります。発疹のでる2－3日まえから発疹がでたあとの5日くらいまでの患者さんは感染力があると考えられています。感染力は、麻疹（はしか）や水痘（水ぼうそう）ほどは強くありません。

風疹の症状は子供では比較的軽いのですが、まれに脳炎、血小板減少性紫斑病などの合併症が、2,000人から5,000人に一人くらいの割合で発生することがあります。その点では軽視できない病気です。また、大人がかかると、発熱や発疹の期間が子供に比べて長く、関節痛がひどいことが多いとされています。一週間以上仕事を休まなければならない場合もあります。

参考：感染症の話（IDWR2001年29週）

http://idsc.nih.gov/idwr/kansen/k01_g2/k01_29/k01_29.html

● 先天性風疹症候群とはどんな病気ですか？

妊婦とくに、妊娠初期の女性が風疹にかかると、胎児が風疹ウイルスに感染し、難聴、心疾患、白内障、そして精神や身体の発達の遅れ等の障害をもった赤ちゃんが生まれる可能性があります。これらの障害を先天性風疹症候群といいます。先天性風疹症候群をもった赤ちゃんがこれらすべての障害をもつとは限らず、これらの障害のうちの一つか二つのみを持つ場合もあり、気づかれるまでに時間がかかることもあります。

先天性風疹症候群がおこる可能性は、風疹にかかった妊娠時期により違いがあります。特に妊娠初めの12週までにその可能性が高いことが認められており、調査によって25－90％と幅があります。予防接種をうけることによって、成人女性なら妊娠中に風疹にか

かることを予防し、または妊婦以外の方が妊婦などに風疹をうつすことを予防できます。
(ただし妊娠中は風疹の予防接種を受けることはできません)

参考：感染症の話 (IDWR 2002年21週)

http://idsc.nih.go.jp/idwr/kansen/k02_g1/k02_21/k02_21.html

● 日本の風疹の流行の現状はどうなっていますか？

答え：かつてはほぼ5年ごとの周期で、大きな流行が発生していましたが、1994年（平成6年）以降は大流行はみられていません。しかし、局地的流行や小流行はみられており、予防接種を受けていない場合、発症の可能性は少なくありません。特に2002年（平成14年）からは局地的な流行がつづいて報告されており、2003年から2004年には流行地域数はさらに増加し、2005年にも流行が続くことが懸念されています。

予防接種とスケジュールについて

● 風疹ワクチンとはどんなものですか。

答え：弱毒化を行った種ウイルス（弱毒株ウイルス）を培養・増殖させ、凍結乾燥したものです。弱毒株ウイルスを接種した場合、通常の風疹感染と違ってほとんど症状はでませんが、風疹ウイルスに対する免疫を得ることができます。

● 風疹は、麻疹（はしか）などにくらべるとあまり重い病気ではないと聞きましたが、なぜ予防接種が必要なのですか？

答え：風疹は小児の場合通常あまり重くない病気ですが、妊婦、特に妊娠初期の女性が風疹にかかると、胎児が風疹ウイルスに感染し、難聴、心疾患、白内障、精神運動発達遅滞などをもった、いわゆる先天性風疹症候群児が出生する可能性があります。また、風疹にかかるとまれに脳炎、血小板減少性紫斑病、溶血性貧血などの軽視できない合併症をおこすことがあります。大人が感染した場合は発熱や発疹の期間が小児に比べて長く、関節痛がひどいことがあり、一週間以上仕事を休まなければならない場合もあります。

風疹の予防接種を行う第一の目的は、妊婦が風疹にかかることによって生まれてくる赤ちゃんが先天性風疹症候群の障害をもつことのないように、またそのような心配をしながら妊娠を続けることのないように、あらかじめ予防することです。予防接種は風疹の自然感

染による合併症の予防にもなり、大人が感染して重症になることも予防します。さらに、多くの方が予防接種をうけると、個人が風疹から守られるだけでなく、ほかの人に風疹をうつすことが少なくなり、社会全体が風疹から守られることとなります。

- 小児の場合、風疹の予防接種はいつ受ければよいか教えてください。

答え：

「標準的な接種年齢」は、現在生後12から36か月とされていますが、「生後12ヶ月から18ヶ月の間」に行くことを強くお勧めします。これにより接種前に感染する可能性を低くすることができます。理想的には、生後12か月で麻疹（はしか）の予防接種を行ない、その一か月後に風疹の予防接種を行うことです。

「定期接種の対象年齢」という言葉もありますが、これは「行政的に定期接種と扱いうるもっとも広い年齢の幅」のことで、風疹では生後12か月から90か月未満とされています。この間に接種をうけると、公費負担を受けることができ、通常無料または若干の自己負担のみで接種できます。

なお、風疹予防接種の記録は免疫の有無の確認に将来必要です。女性・男性ともに生涯大切に保管してください。

- 男性でも風疹の予防接種は必要なのですか。

答え：必要です。風疹は通常あまり重くない病気ですが、まれに脳炎、血小板減少性紫斑病などの軽視できない合併症をおこすことがあります。また、男の子が予防接種をうけず自然感染したときには、妊娠中のお母さんなどに、大きくなってからであれば妊娠中の配偶者（妻）あるいはパートナーなどにうつし、そして生まれてくる赤ちゃんが先天性風疹症候群をもつ可能性が生じます。風疹の合併症から身を守り、家族への感染を予防し、将来自分達のこどもを先天性風疹症候群から守るためにも、男の子も可能な限り早く風疹の予防接種をうけて下さい。

- 風疹の予防接種は以前は女子中学生のみを対象に行なわれていましたが、1995年からは、生後12か月から90か月未満の年齢の男女小児および中学生男女になりました。なぜこの変更が行われたのでしょうか。

答え：女子中学生のみへの予防接種では、世の中全体を風疹から守ることが十分にはできないと考えられるからです。男の子が予防接種をうけず自然感染したときには、妊娠中のお母さんなどに、大きくなってからであれば妊娠中の配偶者（妻）或いはパートナーなど

に風疹をうつす可能性があります。

風疹（の合併症）から身を守り、生まれてくる赤ちゃんを先天性風疹症候群から守るためにも、男女とも可能な限り早く風疹の予防接種をうけて下さい。このために、上述のようにスケジュールの変更が行なわれました。なお、中学生男女への定期接種は、接種対象変更の際に平成15年9月までの一時的な経過措置として行われていたもので、現在定期接種としての風疹ワクチンは生後12か月から90か月未満の年齢の男女小児のみが対象となっています。

- 風疹予防接種をうける費用は大体いくらくらいでしょうか。

答え：定期接種の年齢（生後12か月－90か月未満の子供）の場合は、多くの自治体では補助をすることになっており、原則的に無料または若干の自己負担で接種できるといってよいでしょう。それ以外の年齢の場合は自己負担になるので、接種を行なっている医療機関などに問い合わせてください。料金の設定は、それぞれの医療機関で異なります。

- 風疹のワクチンをうけると風疹にはかからないと考えてよいでしょうか。

答え：すべての薬が100%の効果をもつとは限らないように、ワクチンの効果も100%とはいえません。これまでの報告を総合すると、風疹ワクチン接種を受けた人に免疫ができる割合は95～99%と考えられています。

- 米国、韓国、オーストラリア、カナダ、ヨーロッパ諸国など、麻疹・風疹の予防接種を2回行なう国が少なくないとききました。これはなぜでしょうか。

答え：麻疹・風疹の予防接種は非常に有効な予防手段ですが、一度予防接種を受けた人に免疫がつかないことがあります。麻疹・風疹の予防接種を2回行なうことによって、これらの人にもほぼ確実に免疫を与えることができ、社会全体が麻疹・風疹に対して強い抵抗性を持つことができます。なお、MMRワクチン（麻しん・おたふくかぜ・風しん混合生ワクチン）を使用する国が増えています。

思春期・成人の予防接種

- 成人女性が風疹ワクチンを受ける場合に注意することがあると聞きました。それは何でしょうか。

答え：妊娠可能年齢の女性に風疹ワクチンを接種する場合には、妊娠していない時期（生理中またはその直後がより確実）にワクチン接種を行い、その後2ヶ月間の避妊が必要です。

風疹ワクチンは、大変安全なワクチンで、妊娠中に風疹ワクチンを接種されたため胎児に障害がでたという報告はこれまで世界的にもありませんが、その可能性は理論的にまったく否定されているというわけではありませので、上記の注意が必要です。

● 成人男性に予防接種を行なう必要はありますか？

答え：これまで風疹予防接種を受けたことがない場合は、なるべく早く予防接種をうけることをお勧めします。その理由は20代から40代の男性の4-5人に1人は風疹の免疫を持っていないと考えられるからです。大人が風疹にかかると、発熱や発疹の期間が子供に比べて長く、関節痛がひどいことがよくみられます。一週間以上仕事を休まなければならない場合もあります。また、脳炎、血小板減少性紫斑病、溶血性貧血などの軽視できない合併症をまれにおこすことがあります。

また、男性が風疹にかかると、妊娠中の女性が近くにいた場合、風疹をうつし、その赤ちゃんが先天性風疹症候群となって生まれる可能性があります。

自分と家族、そして周りの人々を風疹とその合併症から守り、生まれてくる赤ちゃんを先天性風疹症候群から守るためにも、これまで風疹の予防接種を受けたことがない場合は、成人男性でも可能な限り早く接種をうけるようにして下さい。

● こどもの時に風疹にかかったと親にいられていますが、この場合予防接種をうける必要はありますか。

答え：これまで風疹の予防接種をうけたことがないのなら、なるべく早く予防接種をうけることをお勧めします。すでに風疹にかかったとの記憶のある人達に血液検査を行ったところ、約半分は記憶違い、または風疹に似た他の病気にかかっていたという調査結果もあります。風疹にかかったことが血液検査などで確かめられていない場合（風疹にかかった記憶だけの場合や、医療機関を受診していても症状だけからの診断で、診断が血液検査によって確認されていない場合など）は必ずしも信頼できません。

たとえあなたがこれまで風疹にかかっていたとしても、予防接種をうけることによって特

別な副反応がおこるなど、問題がおこることはありません。過去に風疹に感染していても、今、予防接種を行うと風疹に対する免疫をさらに強化する効果が期待されることもあるのでより安心です。

- これまで風疹の予防接種を受けたという記録がありません。この場合予防接種をうけるべきなのでしょうか。

答え：予防接種をうけたことが記録で確認されていない場合、男女ともなるべく早く接種することをお勧めします。血液検査で十分高い抗体価があることが確認された場合にはこの必要はありません。

たとえあなたがこれまで予防接種をうけていたとしても、または風疹にかかっていたとしても、再度予防接種をうけることによる特別な副反応がおこることはありません。過去に風疹の予防接種を受けていても、今予防接種を行うと風疹に対する免疫をさらに強化する効果が期待されることもあるのでより安心です。

- 風疹の予防接種の前には、まず風疹の抗体検査（風疹に対する免疫があるかどうかの検査）をうける必要があるとききましたが、2度も医療機関にゆくのは時間的に大変です。

答え：抗体検査を受け、十分高い抗体価があることが確認された場合には、予防接種を受ける必要がなくなります。しかし、抗体価が低い場合（一般に HI 抗体価が 16 以下の場合）は予防接種が必要になります。

時間のない場合は、予防接種の前の抗体検査は必ずしも必要ありません。風疹の感染または過去の風疹の予防接種によってすでに免疫を持っている方が再度接種を受けても、特別な副反応がおこるなどの問題はありません。そのような方の場合、予防接種を行うことで風疹に対する免疫をさらに強化する効果が期待されることもあります。

- 大人が予防接種をうけるにはどこに行けばよいのでしょうか。

答え：まずお近くの小児科医に相談することをお勧めします。最寄りの保健所や、地域の医師会に問い合わせるのもよいでしょう。

妊娠と風疹

- 現在妊娠がわかったばかりの妊婦ですが、これまで風疹の予防接種をうけたことがありません。家族に風疹の予防接種を受けてもらうべきでしょうか。

答え：妊婦の家族内に、「ワクチン接種の記録」または「風疹の確実な罹患歴（症状のみからの診断ではなく、抗体検査などによって確認されたもの）」がない方がいる場合には、その方から妊婦に風疹をうつしてしまう可能性があります。これを防ぐために、家族の方は出来るだけ早く接種をうけることが勧められます。（なお、妊婦が風疹の予防接種をうけることはできません。）

- 家族に妊婦がいる場合、風疹ワクチン接種を受けてもよいでしょうか。接種をうけた者から妊婦に風疹ワクチンのウイルスがうつる可能性はありませんか。

答え：その心配はまずないと言ってよいでしょう。風疹ワクチン接種後3週間以内に、接種をうけた人ののど（咽頭）から一過性にワクチンウイルスの排泄が認められることがありますが、ワクチンウイルスが周囲の人に感染したとの確かな報告はこれまでにありません。むしろ、接種を受けていない家族が自然感染を受け、そこから妊婦が感染を受けるほうがリスクは高いと考えられます。（なお、妊婦自身は風疹の予防接種をうけることはできません。）

- 現在妊娠初期にあります。これまで風疹にかかったかどうかはわかりませんが、風疹予防接種の接種記録は持っています。妊娠中に風疹にかかる可能性はないと考えてよいでしょうか。

答え：予防接種をうけた記録があるので免疫をもっている可能性が高く（風疹ワクチンの効果は95－99%）、現在風疹にかかる可能性は極めて少ないと考えられます。しかし、予防接種を受けた人に免疫がつかないことがまれにあります。そのため風疹患者と密接な接触をすると、感染する可能性が完全には否定できません。念のために、妊娠初期に行なわれる風疹抗体価検査の結果をもとに、かかりつけの産婦人科医に相談してください。

- 妊娠初期の検査で風疹抗体価が十分高くないという結果でした。妊娠中に風疹感染を予防するにはどのような注意をしたらよいでしょうか。

妊娠中とくに妊娠初期は、風疹にかかっている可能性のある人との接触は可能な限り避けてください。また、風疹にかかっても無症状の人がいます。家族の中にワクチン接種記録、

または風疹の確実な罹患歴（抗体検査などによって確認されたもの）のない方がいる場合、その方は至急風疹ワクチンの接種をうけるようにしてください。詳しいことは、かかりつけの産婦人科医に相談してください。（なお、妊婦が風疹の予防接種をうけることはできません。）

予防接種の安全性

- 風疹予防接種の副反応にはどのようなものがありますか。

風疹ワクチンは、副反応の少ない非常に安全なワクチンの一つです。しかし、重大な副反応として、まれにショック、アナフィラキシー様症状、全身のじんましの報告があります。また、まれに（100万人接種あたり1-3人程度）急性血小板減少性紫斑病が報告されています。また、厚生労働省健康局結核感染症課による予防接種後副反応報告書集計報告書によると、風疹の予防接種をうけたあとに副反応の可能性が疑われて入院した例は、平成14年年度に接種を受けた約124万人に対して5件報告されています。

その他の副反応として、発疹、紅斑、掻痒、発熱、リンパ節の腫れ、または関節痛などをみることがあります。成人女性に接種した場合、子供に比して関節痛を訴える頻度が高いといわれています。

- 麻疹（はしか）と風疹の予防接種を同時に受けて問題ないでしょうか。

答え：問題ありません。国内では麻疹ワクチンと風疹ワクチンは現在（2004年9月現在）混合ワクチンではなく、別々になっていますが、このようにあらかじめ混合されていない2種類以上のワクチンでも、接種する医師の判断と接種をうける者の了承のもとに同時に接種することができます（平成15年11月28日健発第1128002号厚生労働省健康局長通知「予防接種（一類疾病）実施要領」第一の18の（2））。

世界的には、可能な場合は複数の予防接種を同時に接種することが推奨されています。麻疹と風疹のワクチンを同時接種することには、1）別々に接種するための待ち時間がなくなり、早く免疫があたえられ、2）何度も接種をうけに行く必要がなくなるという大きな利点があります。